

研究主題 活用力を高め、より良く生きようとする児童の育成

#### 概要説明

「生きる力」を支えるものの一つとして、「持っている知識・技能を活用し自らの課題を解決する力」が注目されている。本研究では、学校における学習活動としての「活用」を

**活用Ⅰ…習得した知識・技能を学習の中で生かす「活用」**

**活用Ⅱ…習得した知識・技能を実生活に生かす「活用」**

に分け、国語科を通して研究することとした。

学習の場面で活用Ⅰ・Ⅱを繰り返すことによって、実生活の中で自然に知識・技能を活用する力（活用力）を得、それがより良く生きようとする原動力につながると考え研究に取り組んだ。

#### 【本研究の〈キーワード〉】

- 生きる力 ○ 習得 ○ 活用 ○ 活用力 ○ 実生活の場
- 思考力・判断力・表現力

## I 研究主題

「活用力を高め、より良く生きようとする児童の育成」

## II 研究主題設定の理由

資料1によると、「勉強は日常生活に役立つ」と感じる日本の児童生徒の割合は、外国に比べかなり少ない。また、資料2からもわかるように、「学校教育は実生活の中では役に立たない」という思いは児童生徒だけのものでなく、入社してから再教育を必要とする社会においても同様である。

これは、◇知識や技能の集積としての学びに意味を見出せない子ども ◇「学びが豊かな生き方に反映される」という実感に乏しい学習活動 という現在の学校教育の一面を反映していると思われる。

#### （資料1）

理科を学習する重要性の認識—中学校2年— I E A国際数学・理科教育動向調査より（%）<sup>1</sup>

国名	理科を勉強すると、日常生活に役立つ	
	2007	2003
日本	53	53
国際平均値	84	84

\*割合は「強くそう思う」「そう思う」を足し合わせたもの

**(資料2)**「学校は仕事に役立つことを教えてくれた」への回答の割合 PISA2003より (%)<sup>2</sup>

国名	全くその通りだ	その通りだ	その通りでない	全くその通りでない
日本	10.8	48.9	30.6	9.0
フィンランド	46.4	48.2	3.6	1.5
OECD平均	41.2	45.7	8.2	3.4

生きる力を支える主要能力として、OECDが定義したものは、①社会的・文化的・技術的ツールを相互作用的に活用する能力②多様な社会グループにおける人間形成能力③自立的に行動する能力である。

また、平成20年3月に示された新学習指導要領でも、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力の重視」がポイントとされ、基礎的・基本的な知識・技能を身につけ、それらを活用する学習を通して思考力・判断力・表現力等を育むことがねらいとされている。すなわち、「生きる力」を支えるものとして、「活用」ということが重視されることになったのである。

習得した知識・技能は、生きていく上で十分に役立つにも関わらず、役立たないと思っている児童生徒が多いのはなぜか、そのギャップを埋めるものこそが、「活用」ではないかと私たちは考えた。「活用」を「知識・技能と探究をつなぐ橋」としてとらえ、学校という場でその橋をどのように設計し、造り、社会につなげていくか、ということが重要であると考えたのである。

一方で、知識や技能を単に活用すればよいのではなく、活用の方向性を設定したいと考えた。梶田颯一氏は<生きる>ことの2水準として、現実的社会的水準（外の世界に生きる）と本質的実存的水準（内の世界に生きる）を挙げ、

「主体的に生きる」力を育成していくことは、現実的社会的水準で生きる（外の世界に生きる）力を身につけていくだけでなく、本質的実存的水準で生きる（内の世界に生きる）力を身につけていくことにほかならない。<sup>3</sup>

とした上で、外の世界と内の世界を次のようにまとめている。

	外の世界に生きる (現実的社会的水準)	内の世界に生きる (本質的実存的水準)
志向性	社会的位置・役割（職業・資格・地位・収入・榮譽・財産）を目指し、獲得し、生きる。 世のため人のためを目指す。	自分自身に固有の生を自覚し、深め、味わい、表現し、生きる。 自分自身の充実・満足を目指す。
期待され強 調される教 育成果	世俗的な適応・対処能力・有効性を持つ知識・技能・マナー・判断力・問題処理能力など。	耕され深められた内面世界。 内的根拠に依拠して表現、発言、行動する姿勢と能力。

さらに梶田氏は、

外的社会的な世界で生きていくためには、内面的な世界を充実させることが必要である。この課題は一人ひとりの内面的な世界を耕し、深め、その世界を土台にして、自分自身に責任をもって生きる、という人間教育である。外的社会的な世界と内面的な世界の両方で十分に生きて

いくことを、人間としてのあるべき生き方として考える。  
と述べる。

梶田氏の論を研究するうち、単に「知識や技能を生かす」というだけで「活用」を捉えるべきではないと考えるようになった。「知識や技能を生かす」活動の先に、「より良く生きる」という方向性を持たせたいと考えるようになったのである。

さらに、学校での意図的な「活用」の学習が、活用力（実生活の場で自然に知識・技能を活用する力）を育て、「より良く生きようとする児童」を育成できるのではないかと考えるようになった。

以上のことから、

- 「より良く生きようとする人間を育てる」ことを目指す一つの方法として、
- 学校と社会を結ぶ「活用力（実生活の場で知識・技能を活用する力）」を育成することが必要であり、
- そのためには、学校での意図的な「活用」の学習の積み重ねが重要であると考え、本研究主題「活用力を高め、より良く生きようとする児童の育成」を設定した。

### Ⅲ 研究の方法及び内容

学習で得た知識や技能を実際に日常生活に生かそうと考えても、活用場面は限られる。学習内容の全てが、じかに生活に直結し、生かせるとは限らないからである。

「活用」を「実生活の場への活用」に発展させるため学校教育にできることは、授業の中で習得した知識・技能を活用する喜び、その有用性を繰り返し実感させることである。

そこで、本研究部では、習得した知識・技能を活用する学習場面を授業の中に意識的に位置づけることに重点を置くことにした。それにより、知識・技能のより確実な定着を図るとともに、知識・技能を活用するための思考力・判断力・表現力を育むことができ、さらに、児童・生徒の意欲的、かつ主体的な授業への参加を促し、実生活で活用する姿へとつなげることができる考えたのである。

研究初年度の本年としては、具体的な実践として、全ての教科の基礎となり、新学習指導要領でも重視されている国語科を通して検証することとした。国語科において、身に付けたい力を明確にすることはもちろんであるが、その力を学習の中で「活用する」ことをねらいとして、研究に取り組んでいくこととした。

#### 1 研究の方法

- (1) 本研究部における「活用」を定義する。
- (2) それをもとに、授業において「活用」をどのように具現化するかを決める。
- (3) 授業実践をして成果と課題を明確にし、来年度につなげる。

#### 2 研究の内容

##### (1) 本研究部における「活用」の定義

##### ① 「活用」の現状と、現状を捉える上での課題

これまで教育のあり方については、「詰め込み」か「ゆとり」か、「知識」か「体験」か、「教科」か「総合」か、「指導」か「支援」か等、二項対立的に議論されることが多かった。

しかし、学校教育法が改正され（第30条）、学力の三要素が規定されることにより、論点

は、「学習のあり方」から「学習プロセス」へと変化しつつある。その三要素とは、「生涯にわたり学習する基盤が培われることを目指し」、

ア 基礎的な知識及び技能を習得させること【習得】

イ これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむこと【活用】

ウ 主体的に学習に取り組む態度を養うこと【意欲】

である。

一方、中央教育審議会の答申においては、「活用」に重点を置いた学習活動として次のような例示をしている。

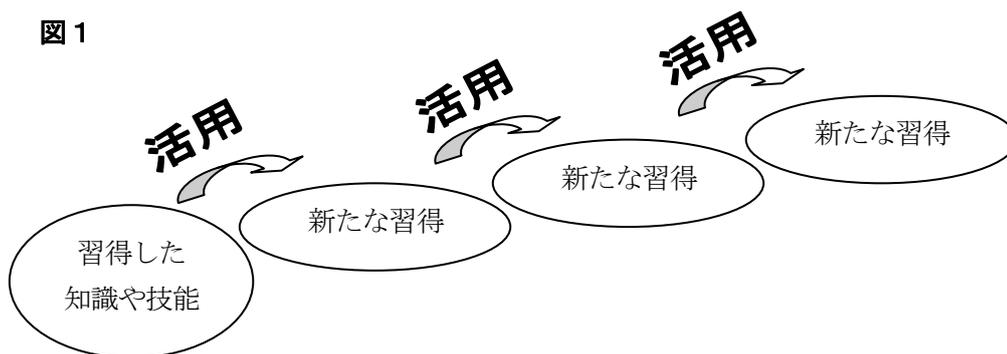
- ・ 衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する。
- ・ 自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ、分析したことを論述する。
- ・ 理科の調査研究において、仮説を立てて、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察し、まとめ、表現したり改善したりする。

これらの事項を確認し、実際の国語科の学習活動を考えるうちに、次の3点が課題として浮かび上がってきた。

課題1…活用の学習＝習得の学習ではないか。

- ・ 実際の授業を想定すると、図1のように、習得した知識や技能を活用した学習によって新たな習得を得る、という過程で学習は進む。すなわち、それぞれの学習活動は目的を持つため、「習得のための学習活動」「知識や技能を活用する学習活動」という両方の側面を持ち合わせることとなる。単元の中に活用の場面を設定しても、その中で知識の習得があるなど、活用する学習活動＝習得のための学習活動となる場合が多い。そう考えるなら、何を活用の授業と考えるのか、ということが分からなくなる。

図1



課題2…知識・技能を活用して習得する授業と、知識・技能を生活に生かす授業の、どちらを活用の授業と考えるのか。

- ・ 「活用」は、「単なる知識の習得ではなく実際の生活で役に立つ」ということを目指す。活用について、「『説明文を書く』ことを学習したら、条件をいろいろ変え、繰り返して書く活動を通して、目的や条件に合った説明文を書く力が身についてくる」<sup>4</sup>と説明する人もいれば、「実際の人生で役に立つ、応用力をつける」<sup>5</sup>と説明する人

もいる。「学習→学習」のドリル型活用と、「学習→生活」の応用型活用のどちらを活用と考えるのか、またはどちらも活用と考えるのか、ということが分からなくなる。

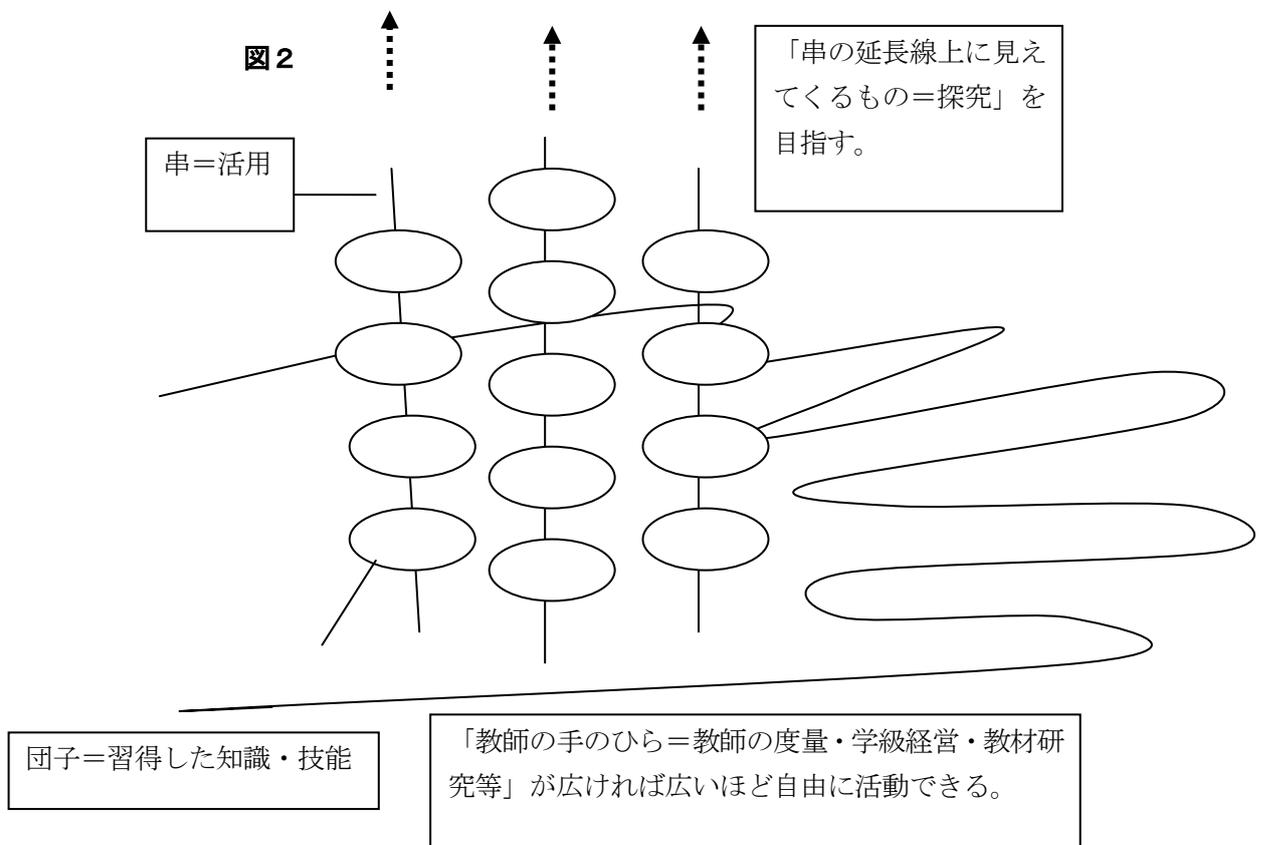
課題3…これまでも「活用」という学習活動は行われてきているのではないか。

- これまでも、長方形や平行四辺形の面積の求め方をもとに三角形の面積の求め方を考えるという学習を行ってきている。同様に、これまでも生活の中に生かすという活用の学習も数多く行われてきた。新しく示された活用は、これまでの活用とどのように違うのか。同じではないのか。

## ② 相原貴史教授による新たな視点

相模女子大学相原貴史教授に指導を受け、新たな視点を与えられた。

- 「自分がやらなければならないのだ。」という学びへの心構えの集合体が活用につながる。
- 「目の前の課題をなんとかしてやろう。」という意識がまずあって、解いていく面白さや解決していく喜びという意識が活用につながる。
- 教師の大きな手のひらの上で、習得、活用、探究という活動は行われ、活用を可能にするのは、「活用のための必然性」である。
- 図2は、相原教授の視点を図示したものである。

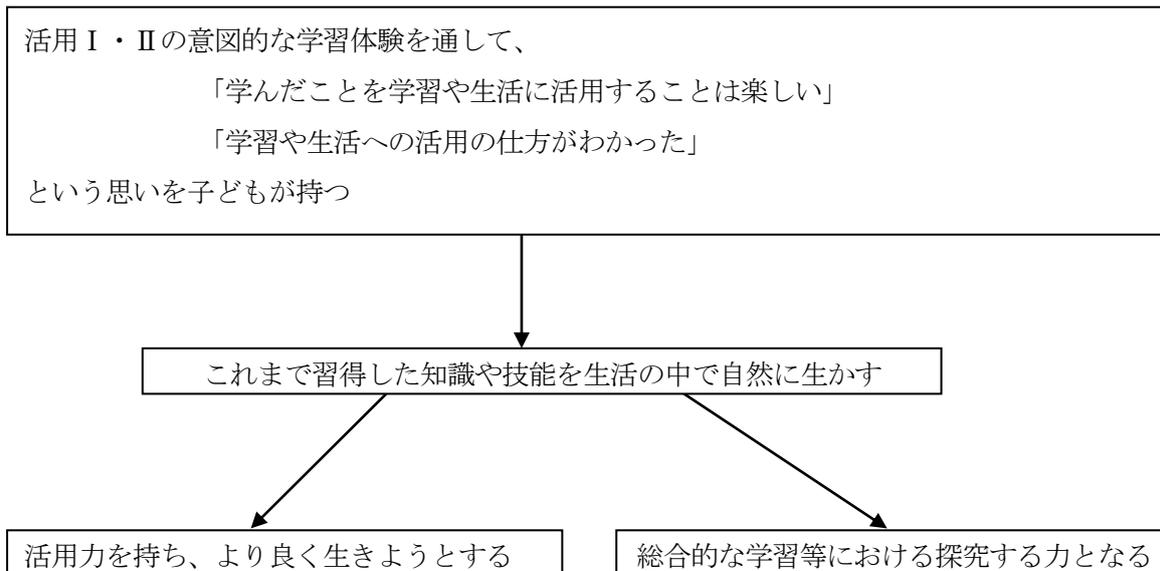


### ③ 本研究部における「活用」の捉え方

3つの課題解決への話し合いと相原教授のアドバイスにより、本研究部では、学校における活用の学習を次の2つに分けることとした。

- ・ 活用Ⅰ…習得した知識・技能を学習の中で生かす「活用」の学習
- ・ 活用Ⅱ…習得した知識・技能を実生活に生かす「活用」の学習

さらに、活用Ⅰ・Ⅱを学習することにより、次のようにつながっていくと想定した。



さらに、相原教授からのアドバイスをもとに、活用Ⅰ・Ⅱを支えるものとして次のことを確認した。

- 「やりたい。」「学びたい。」と思う場づくりが活用の底流にあること。
- 意欲を持って取り組むものの行き詰った時に、過去に習得した知識・技能やその時に習得した知識・技能を使ってみようとするのが活用であること。
- 教師の度量、学級経営、教材研究等、これら全てのことが活用の土台になること。
- 活用を評価・改善するメタ認知的な目を持たせる必要があること。

これまでのことを全てまとめたものが図3である。(次ページに掲載)

図3

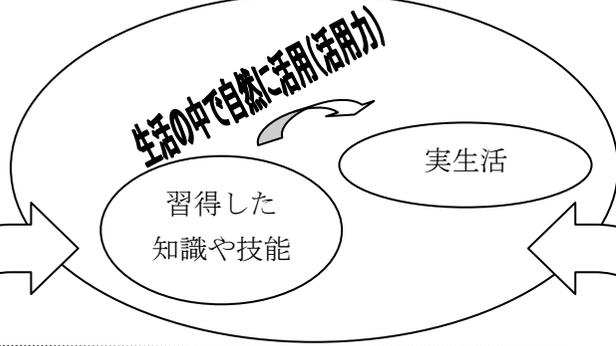
自分を評価し改善する目

活用力を持って、より良く生きようとする



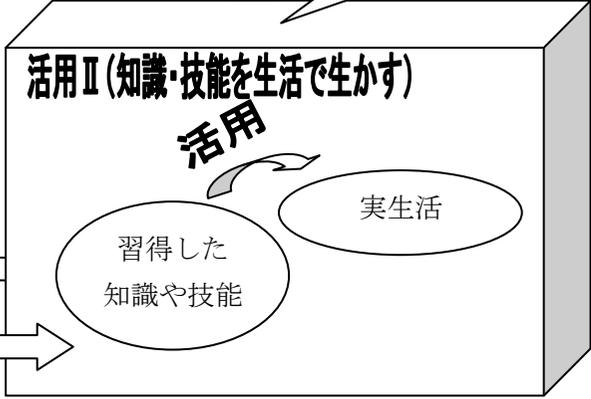
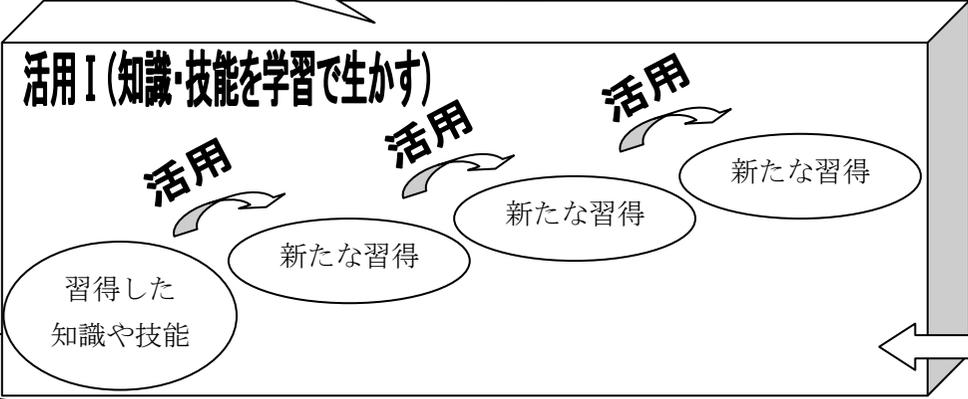
実生活

- ・ 学んだことを活用するのは楽しいな。
- ・ 学んだことをこんなふう to 生活に活用するのか。

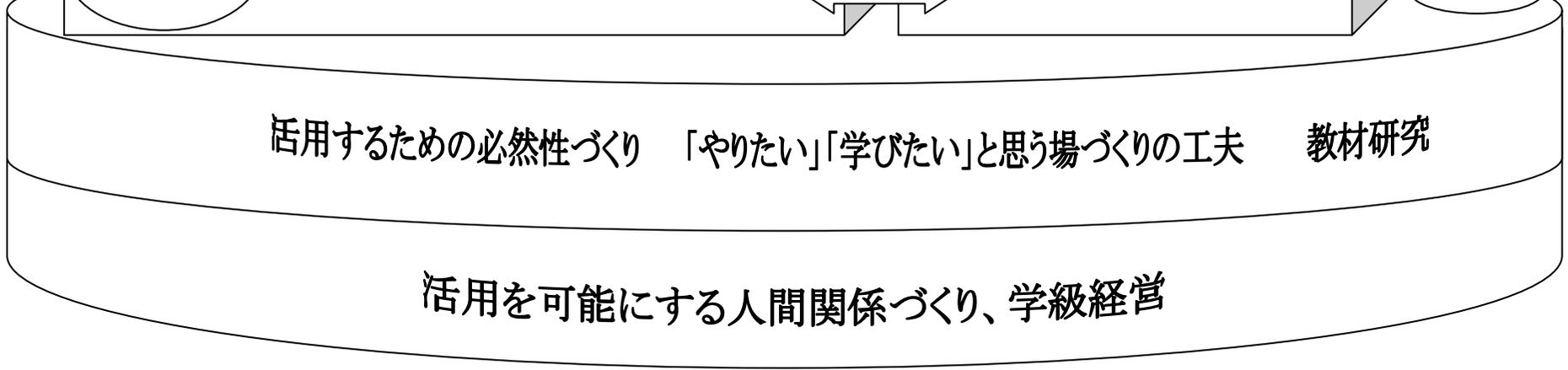


- ・ 学んだことを生活に活用するのは楽しいな。
- ・ 学んだことをこんなふう to 生活に活用するのか。

学校



総合的な学習等における  
探究



#### ④ 中央教育審議会の答申の活動例を分類

中央教育審議会の答申において「活用」に関わる学習活動が示されている。それらを活用Ⅰ、活用Ⅱ、評価・改善という3つの観点で分類してみた。

##### 活用Ⅰ

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
  - ・日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する。
- ② 事実を正確に理解し伝達する
  - ・身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する。
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
  - ・学習や生活上の課題について、事柄を比較する、分類する、関連付けるなど考えるための技法を活用し、課題を整理する。
  - ・文章や資料を読んだ上で、自分の知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめて、A4・1枚（1000字程度）といった所与の条件の中で表現する。
  - ・自然現象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり、これらを用いてわかりやすく表現したりする。
  - ・自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ、分析したことを論述する。
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる
  - ・予想や仮説の検証方法を考察する場面で、予想や仮説と検証方法を討論しながら考えを深め合う。
  - ・将来の予測に関する問題などにおいて、問答やディベートの形式を用いて議論を深め、より高次の解決策に至る経験をさせる。

##### 活用Ⅱ

- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
  - ・需要、供給などの概念で価格の変動をとらえて生産活動や消費活動に生かす。
  - ・衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活に生かす。

##### 評価・改善

- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
  - ・理科の調査研究において、仮説を立てて、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察し、まとめ、表現したり改善したりする。
  - ・芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善する。

#### (2) 活用する学習活動の授業への具現化

本研究部では、習得した新しい知識を活用する単元を具現化するために「やまなし」を題材として、活用Ⅰ・Ⅱを設定し、授業を組み立てることとした。

活用Ⅰ・・・これまで学習した「対比」を活用し、作品を読み深める。

活用Ⅰを成立させるためには、これまで学習してきた「対比」を共通理解する必要がある。そのため、「対比」を別のプリントを使い、取り立てて指導することにした。

活用Ⅱ・・・読み深めた主題をもとに、自分にとっての「やまなし」を考える。

対比を通して読み取った「やまなし」の主題を自分の生活に置き換えることにより、作品を身近に感じ、自分の生き方に生かすようにした。

## IV 実践例

### 第6学年1組 国語科学習指導案

平成20年10月30日(木) 5校時

於 (6年1組 教室)

授業者 中田利明

在籍児童数 35名(男子16名、女子19名)

#### 1 単元名・教材名

表現を味わい、豊かに想像しながら読もう。

「やまなし」 宮沢賢治 補助資料「イーハトーヴの夢」

#### 2 単元について

##### (1) 児童の実態

本学級の児童は本を読むことが好きである。週2回朝の時間に設定されている「読書タイム」でも、いつも静かに本を読んでいる。

本を読む種類については、物語作品を読む子も多いが、その種類は、最近のファンタジックなものが多く、本教材「やまなし」のような、いわゆる昔ながらの名作と呼ばれるもの、昔の作家の作品を読んでいる児童は少ない。宮沢賢治の作品についても同様に、あまり多くは読まれていないようである。

児童は、文学作品・説明文教材の学習を通して、主題や要旨をとらえる方法を学習してきている。物語の学習としては、上巻「カレーライス」で、父と子2人の登場人物の言動に着目し、直接感情表現されていない、人物の言動の中に表れる心情を読み取り、特に主人公の「ひろし」の変容、成長をとらえ、作品の主題を考えた。場面ごとに分けて登場人物の関わりや心情について考える学習だったため、多くの児童に場面ごとの読み取りの力をつけることができた。単元の終末の段階では、主人公の変容や成長について、話の初めのほうと終わりのほうを比べて考えることができた子も多かった。しかし、「主題について考えてみよう」と投げかけると、「この作品は、こういうことを読者に伝えようとしている」という内容を的確にまとめられる子はまだ多くなかった。

「読むこと」の能力に関しては、一人ひとりの差はまだ大きい。また、5年生までの物語作品で見ても、これまでは話の展開に沿って主人公が変容していく作品を読むことがほとんどで、本教材「やまなし」のように、(主人公の変容ではなく)対比や情景描写を中心に読み取っていく作品は初めである。

##### (2) 教材について

本教材は、この物語が「二枚の青い幻灯」によって語られていることを始めと終わりに示している。読者に、本を読むということだけでなく、映像を思い浮かべさせるという効果をもたらしている。

場面の季節は五月と十二月。

○五月①かきの兄弟がクラムボンのことで話している。②そこへ、魚が現れ、クラムボ

ンを殺してしまう。③その魚も、かわせみに殺されてしまう。それをこわがる兄弟に、おとうさんのかにが、心配はいらないとやさしく話しかける。

○十二月①かにの兄弟があわの大きさ比べをしている。②そこへ、「トブン」と何か落ちてきた。かわせみかと思ったら、お父さんのかには、それが「やまなし」であることを教え、親子三匹で、その「やまなし」を追いかける。おいしいお酒になることを楽しみにして、自分たちの巣穴へかえっていく。

この二つの季節は、さまざまな意味で対比されている。情景描写や出来事、かにの子どもの様子や心情などを、比べて読むことが可能である。

また、情景描写も表現豊かで、美しい場面、楽しそうな場面、不気味な場面、不思議な場面等、児童が叙述に即して読むことで、状況を把握しやすく、想像力を働かせて読めるような作品である。

独創的な造語や比喩（擬人法）、擬態語や擬声語等の巧みな表現技法がふんだんに使われた、読み手の想像力を大いに刺激する作品である。

作品の主題は次のとおりである。

- ・自然界の厳しさ、自然界のありがたさ。
- ・自然界の中では、厳しくつらいこともあり、嬉しくありがたいこともある。
- ・明るく豊かで幸せな中にある厳しさ、厳しくつらい中に見える豊かさ。
- ・生命のつながりの不思議、尊さ。他の生物に食され死んでしまう命、その生物の死をもって生を得る生物。生物（動物、植物）の死は、他の生物に生を与える。自然界の摂理。

### (3) 指導について

本単元では、子どもたちが2つの場面「五月」と「十二月」を「対比しながら作品を読む」という客観的な読み方を指導することに重点をおいて、そこから主観的な読みが膨らむようにしていく。さらに、五月と十二月を対比させながら読んだ結果、子どもたちが「やまなし」という作品から何を感じ取るのか（主題）、考えさせる。

そのために、単元の初めに、「五月」と「十二月」のイメージ画（どんな場面、どんな水の底の世界であるか）を描かせる。それによって2つの場面の全体像をつかませることができると。五月には「魚」や「かわせみ」が現れ、十二月には「やまなし」があるということは間違いなく気がつくことであろうが、それ以外の情景描写にも少しずつ気がついていくと思われる。そして、2枚の絵を描きながら、五月と十二月の世界の違いに気がつき始めるであろう。

次に「言葉による表現」で対比的なものを見つけさせる。絵ではうまく表現できないこともあり、言葉による表現の効果というものを考えることにつながる。五月と十二月を言葉で対比的にとらえてみることによって、それぞれの場面の感じ、イメージ、世界を想像させていく。

五月と十二月の二つの場面を比べて違いを感じ取ったところで、かにの兄弟の心情を話の展開に沿って考えさせたり（心情曲線）、「魚」や「かわせみ」が現れる前と後の情景描写の違いや「やまなし」が落ちてくる前とあとの情景描写の違いにも気づかせたりする。

以上のような指導を通して、児童が作品を対比させながら客観的に読むことによって、作品を読み深め、最終的に一人一人が作品の主題に気づくようにさせる。

また、対比という手法を通じて読み取った「やまなし」の主題を自分の生活に置き換えることによって、より作品を身近に感じられるようにする。読み取ったことが自分の生き方の中に生かされれば良いと思う。

また、今後はさらに対比という手法を使って別の作品を読んだり、自分の表現活動に使用したりする経験もさせてみたい。つまり、読み取った知識や学習した読みの技術をさらに「活用」することで、国語の学力の定着を図りたいと考える。

作者を意識させるということでは、こういう作品を書き上げた宮沢賢治についてどのように考えるかということにも触れさせたい。補助資料「イーハトーヴの夢」も読み合わせながら、作者についても考えさせたい。

#### (4) 研究テーマとの関連

研究テーマとの関わりから単元を見た場合、まず本単元は、既習の学習内容を使って作品を読み取ろうとしていることが1つの活用の学習であるといえる。登場人物の言動から心情を読み取ること、細かい情景描写や擬態語、擬声語、比喩表現、色彩語等から場面を想像すること。これらの学習内容は、これまでの読み物教材の中で学習してきたことである。また、特に本単元では、2つの場面对比しながら読むということを中心に学習を進めていくが、この「対比」についても既習の内容であり、それを活用する学習となっている。ただし、本教材「やまなし」ほど、物語の全体が対比的に表されているものに出会っていない児童には、活用の学習であるとはいえ、あらためて「対比」について学ぶ習得の学習になるともいえる。

また、作品の主題について考えることは、作者である宮沢賢治のものの方の見方、考え方を理解することであり、児童によっては新しいものの方の見方、考え方を習得する学習になる。そしてその考え方を自分の生活や生き方に照らし合わせて考える児童がいたとき、それはまさに児童が、今持っている力を実生活において「活用」したことになる。国語科の学習を通して身につけたものが、生きてはたらく力になったということになる。

### 3 単元目標

#### 【興味、関心、意欲、態度】

○「やまなし」の情景や言葉の使い方に興味をもち、学習活動に参加しようとする。

○宮沢賢治の作品や生き方に興味をもち、作品を読んだり、生き方について考えたりしようとする。

#### 【読むこと】

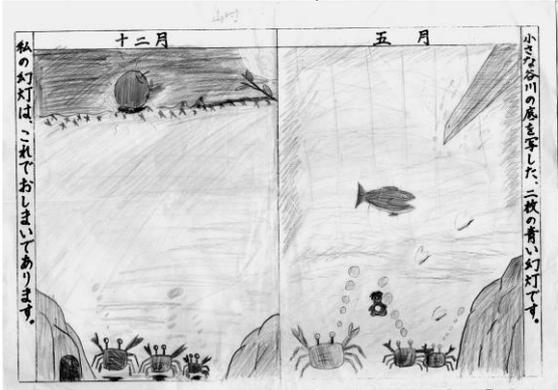
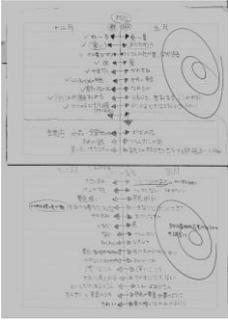
○場面ごとに描かれている出来事や描写から、それぞれの場面の様子について考えたり、2つの場面对比させたりすることで、作品の主題に気づくことができる。

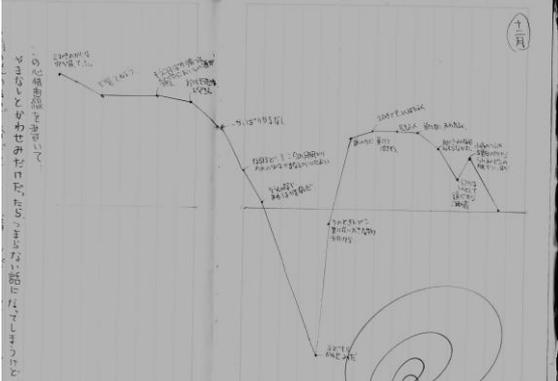
#### 【言語事項】

○対比されている表現、比喩（擬人法）、擬態語、擬声語、色彩語等の表現効果を理解しながら、情景を想像することができる。

4 学習指導計画（全12時間 本時7／12）

時	学習活動	学習内容	・指導上の留意点・支援（○）及び評価（☆）
1	単元名について考える。 全文を通読する。 作品の特色について考える。 感想を書く。 主題や題名について自分の考えを書く。	新出漢字 感想の書き方	・指導上の留意点・支援（○）及び評価（☆） ○感想を書けない子には観点を示す。 ・作品の特色を考えたり、感想を書いたりする中で、この作品が「五月」と「十二月」を比べているものだと気づかせたい。 ☆作品の展開や表現方法に関わって自分の感想を書くことができる。
<p>児童の感想と印象に残った表現（児童のノートより）</p> <p><b>【5月】</b> 私は、クラムボンという言葉が不思議だなと思いました。意味が分からないので、どういものか分からないけど、すごく不思議に思いました。クラムボンは殺されたなど書いてあるので、生き物だと思いました。<b>【12月】</b> やまなしが落ちてきたとき、こどものかには、かわせみだと首をすぼめていったけど、「やまなしだ」とお父さんが言ったので、子どものかには、ほっとしたと思います。</p> <hr/> <p><b>【5月】</b> 最初に出てきたクラムボンというのがよく分からなかった。日光の黄金が夢のように水の中に降ってきたなどの言葉の映像がたくさん頭に入ってきた。お魚が上へ行ったり下に行ったりするのがよくわからない。ただ、いきなりコンパスのように黒くとがっているものが来たら、誰だってびっくりすると思う。私はびっくりした。疑問がたくさん<b>【12月】</b> かにの兄弟が大きくなった。けれど、あわはどちらの方が大きいかなんて、おもしろいことをしていると思った。水の中のやまなしのにおいて、どんなにおいなのかと思った。やまなしというのは、なしなのか、おいしいのか、なんて考えました。</p>			
2	感想を発表しあい、作品の全体像をつかみ、学習方法や読みの視点、について考える	・作品の全体像（2つの季節、登場するもの、展開） ・学習方法（2つの季節を比べるような読み方をすること） ・読みの視点（展開、色彩語、擬声語・擬態語、比喩・擬人法）	・感想の中から五月と十二月を比べているものに注目させて、「対比」させながら読み進めていくと主題に迫れることを理解させる。 ☆作品が五月と十二月の対比として表現されていることに気がつくことができる。（発表、ノート）
3	作品の叙述を手がかりに、「五月」と「十二月」についてイメージ画を描く。	・イメージ画の描き方 ・対比について ・読みの視点について（展開、色彩語、擬声語・擬態語、比喩・擬人法）	・大きな紙に絵を描くように、五月と十二月の叙述を表していく。 ○なかなか書き始めない子がいたら、読みの視点に基づき少し教師も書いてみせる。 ☆2枚のイメージ画の中に文中に出て来

		<p>る情報を書き込むことができる。(2枚のイメージ画)</p>
<p>4 5</p>	<p>「五月」と「十二月」の場面を比べて、対比される表現を見つける。(一人学習)</p>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・五月と十二月の本文を一度に見ることができるように資料を準備する。</li> <li>○対比という学習活動を理解させるため、例を挙げて示す。</li> <li>・学習時間を十分に確保する。</li> <li>☆2つの場面で対比して表現されているものを見つけることができる。(ノート)</li> </ul>
<p>6</p>	<p>・対比された表現を全体で発表し、確認する。</p>	<p>対比 情景描写 色彩語 擬態語・擬声語 比喩</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に見つけた、五月と十二月の対比的な表現を全体で書き出す。友達の発表は自分のものにさらに書き加える。</li> <li>・一つ一つの対比について、どのような言語表現であるかおさえたり、その印象についても触れたりしておく。次時につながる。</li> </ul>
<p>7 本 時</p>	<p>・対比された表現から、2つの場面についてどんな谷川の世界と感じるか話し合う。</p>	<p>対比表現の分類化 いくつかの表現をもとにした場面のイメージ化、抽象化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に出された対比表現をいくつかの視点で分類、整理していく。そこから感じ取れる場面の印象について考える。</li> <li>○グループによる話し合いも取り入れ、自分の考えの参考にさせる。</li> <li>☆2つの場面の世界について、抽象化した表現で考えをまとめ、2つの場面の違いに気づくことができる。(発表、話し合い、ノート)</li> </ul>
<p>8</p>	<p>かにかの兄弟の心情について五月と十二月を比べて考える。</p>	<p>心情曲線について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・かにかの兄弟の心情を「楽しい・うれしい」「こわい・悲しい」の2つの基準にして心情曲線を書かせる。</li> <li>・心情曲線の中には、その心情となる理由や転機となるならばそのきっかけを分かるように記入させる。</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人活動やグループ活動を取り入れたい。</li> <li>○グループによる話し合いも取り入れ、自分の考えの参考にさせる。</li> <li>☆2つの場面の心情曲線を出来事や理由をはっきりさせながら作成し、2つの場面の違いに気づくことができる。(発表、話し合い、ノート)</li> </ul>	
9	<p>「魚」「かわせみ」「やまなし」が話に出てくる前と後の表現について考える。</p>	<p>話の転機          比喩、擬態語、擬声語          色彩語</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・比喩、擬態語、擬声語、色彩語についてあらためて理解させる。</li> <li>○対比を見つけたときの表現を表現方法ごとに分けさせる。</li> <li>☆五月と十二月の対比だけでなく、それぞれの中にも、対比的な表現が散りばめられていたり、話の転機があることに気づくことができる。</li> </ul>
10	<p>作品の主題について自分の考えを書き、話し合う。</p>	<p>作品の主題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ここまで学習してきたことから、作品の主題について考えさせたい。</li> <li>○川の中の話、自然界の厳しさの話だけで終わっている子には、私たち人間の世界にも通じる場所がないか考えさせたい。</li> <li>☆作品の主題について自分の考えを書ける。(話し合い、発表、ノート)</li> </ul>

児童の作品より（ノートより）

宮沢賢治さんは、読者に、谷川の底の自然、たとえば怖いかわせみが入ってきたり、かぼの花びらが流れていたり、やまなしみたいに「いいな」と思うものが落ちてきたり、そういう自然を伝えたかったと思う。かわせみみたいに怖いことがあっても、やまなしみたいにうれしいことがあるんだと伝えたかったんじゃないか。

宮沢賢治は「苦しい中に喜び、楽しさを見つける」という考えを持っていた。だから、かわせみのようにこわいものやケンカなどあまり楽しくないようなところに、やまなしのようにふと喜びを見つけてほしいという意味で「やまなし」という題名をつけたのだと思う。

---

宮沢賢治は、最初悪いことがあっても、必ずそのあとにはいいことがあるから、あきらめないで欲しいと持っている。出版できなかつたけれど、あきらめないで物語を書いていたときの、宮沢賢治さんの気持ちがこの話に入っていると思う。賢治さんは、自然が好きだから、かぼの花びらや「やまなし」などを取り入れたのだろう。

かにたちが、かわせみじゃないと分かってうれしかったことが、「やまなし」という題名につながったのだと思う。

11	自分にとっての「やまなし」について考える。	主題についてのより深い理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習した作品の主題について、自分の生き方に照らし合わせることによって、より深く理解させる。</li> <li>☆自分にとっての「やまなし」を主題に沿って考えることができる。(ノート)</li> </ul>
<p>自分にとっての「やまなし」・・・つらいときに、ふっとおとずれる、小さな幸せ (児童のノートから)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ サッカーの試合で負けて暗かったときに励ましてくれた声</li> <li>・ 夜ランニングをしていて、寒くてつらいときに見えたきれいな星空</li> <li>・ けんかをしてしまって落ち込んでいるときに上手く仲直り</li> <li>・ 野球でずっとダメだったけど、最後に打てたこと</li> <li>・ 発表で緊張していたけど、上手く言えた。</li> </ul>			
12	宮沢賢治の作品の書き方について考える。 「イーハトーヴの夢」を読んで、賢治の「生き方」について知り、感想を書く。	宮沢賢治の生き方	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆「やまなし」の作品の特徴に触れた感想を書くことができる。</li> <li>☆賢治の生き方と「やまなし」の作品の主題を関連付けて感想を書くことができる。</li> </ul>

5 本時の学習 (7 / 12 時間目)

(1) 本時の目標

【興味、関心、意欲、態度】

- ・五月と十二月の場面から対比されている表現を見つけて発表しようとしたり、表現から受けるイメージについて話し合ったりしようとしている。

【読むこと】

- ・五月と十二月の対比表現からそれぞれの場面の特徴をとらえることができる。

【言語事項】

- ・対比された言語の一つ一つについてその言葉の印象を表現することができる。

(2) 評価の規準

【興味、関心、意欲、態度】

- ・五月と十二月の場面から対比されている表現を見つけて発表しようとしたり、表現から受けるイメージについて話し合ったりしようとしている。

(ノート、発表、話し合い)

【読むこと】

- ・五月と十二月の対比表現からそれぞれの場面の特徴を対比的にとらえ、言葉で表現することができる。

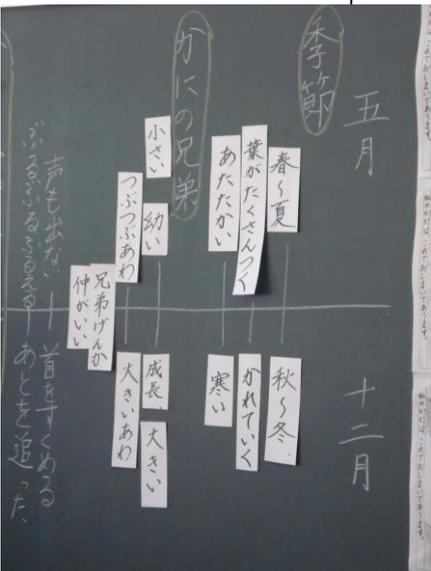
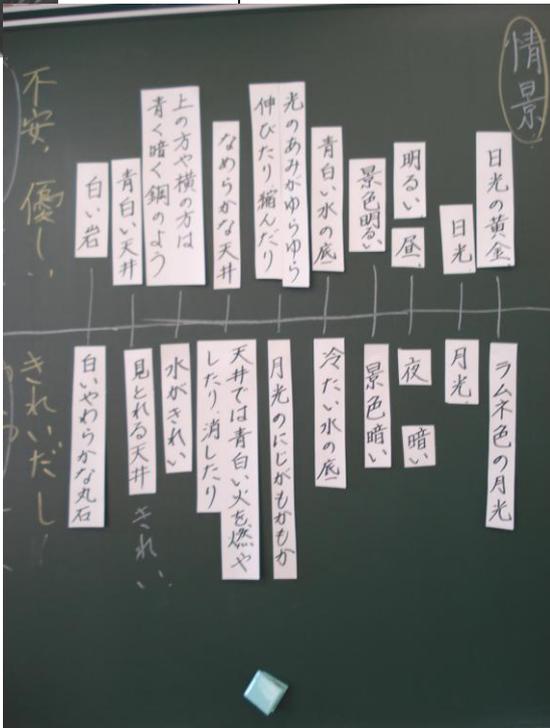
(ノート、発表、話し合い)

【言語事項】

- ・対比された言語について、その言葉の印象を表現することができる。

(ノート、発表、話し合い)



<p>10</p> <p>5</p> <p>10</p> <p>2</p>	<p>3、対比されたことから、それぞれの場面の感じ、イメージを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人で→グループで</li> </ul> <p>4、自分の考えを発表する。</p> <p>5、2つの場면을対比的にまとめる。</p>	<p>□五月…こわい、恐ろしい、不安、明るい、不思議</p> <p>□十二月…楽しい、嬉しい、静か、寒い、平和、穏やか</p> <p>□五月…季節的には明るく暖かいが、その中でこわくておそろしいことが起きる世界</p> <p>□十二月…季節的には暗く冷たい世界だが、その中で嬉しく喜びを与えられる世界</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの場面を全て1つに表すのではなく、「五月にはこういう表現がある」「十二月にはこういう表現がある」という見方でもよい。</li> <li>・グループで話し合わせることにより、多くの児童の考えを自分の言葉で発表させたい。</li> </ul> <p>☆2つの場面の相違点についてとらえ、場面が与える印象について読み取ることができたか。(ノート、発表、話し合い)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童から出てきたものを教師は大まかにまとめて話し、2つの場面の違いを確認させる。</li> <li>・かへの兄弟の心情の移り変わりを読み取ることが知らせる。</li> </ul>
			
	<p>6、次時の学習について知る。</p>		

(4) 板書計画

	五月の谷川の底は、	情景描写	かにの兄弟の前に現れたもの	かにの兄弟	季節	課題 やまなし 五月と十二月の対比から、2つの場面が表そうとしていることを読み取ろう。 宮沢賢治
世界					五月	
	十二月の谷川の底は、					
世界					十二月	



●本単元の成果と課題

(成果)

- ・ 物語の展開にしたがって前のほうから順に課題を作って読み取るという活動でなく、五月と十二月の場面对比させるという、作品全体を見わたすような学習活動は、児童には新鮮な試みであったようで、関心を持って取り組んでいた。
- ・ 比喩、擬態語、擬声語、色彩語というこれまでの学習内容を、あらためて本単元で学習することができた。「やまなし」という教材によって、児童はその表現方法の効果を実感でき

た。

- ・ 「対比」の効果を考えながら作品を読み取ることができた。五月の世界、十二月の世界を読み比べることで見えるものがあることに児童が気づくことができた。
- ・ 「対比」する過程で、文章中に表されている表現を視点（季節、かこの兄弟の行動、かこの兄弟の前に現れたもの、情景描写）ごとに「分類」という学習活動を入れたが、児童にとってはすでに出されている表現を分類し、整理していく活動は分かりやすく、また、2つの場面の違いにも気がつくようになり、特に意欲的に学習する姿が見られた。
- ・ 既習の学習内容を想起しながら、それを本単元の中で利用する、生かす、「活用する」ことで、児童は主体的に学習をすすめることができ、その既習の学習内容をより深く理解し、また別の学習において、さらに上手に活用するものと思われる。
- ・ 「やまなし」の作品から読み取った「明るく豊かで幸せな中にある不安や厳しさ、厳しく暗い中に見える喜び、幸せ」を自分の生活に置き換えて考えられる児童がいた。学んだことを実生活に生かすという「活用」ができたといえる。

#### （課題）

- ・ 既習の内容については、一度の指導では児童に定着しないものがあり、児童自らが既習の学習内容を「使える」と感じるようにするため、繰り返し指導していきたい。
- ・ 「自分にとってのやまなしとは」という課題については、難しいと感じる児童もいた。学んだことを実生活、実体験に照らし合わせるという学び方の経験の必要性を感じた。
- ・ 学んだことが、自分のためになったという実感が持てる授業をこれからも考えていきたい。そして学ぶことが楽しいと思う児童を育てていきたい。

## V 研究のまとめと今後の課題

### <成果>

- ・ どのような知識・技能を習得させ、それをどのように活用させるかを明確にしたり、意識したりする重要性を確認することができた。
- ・ 授業の中で習得した知識・技能を活用する喜び、その有用性を繰り返し実感させることにより、「活用力をもち、よりよく生きようとする児童が育つのではないか」という仮説を持つことができた。
- ・ 教師が指示を出して活用させるのではなく、活用したい、活用しなければならないという場の設定、意識の共有、授業の工夫を土台とした必然性のある授業作りの大切さを感じるようになった。
- ・ 「やまなし」の授業研究では、「対比」というこれまでの習得事項を知識・技能とした。それを活用して、「五月と十二月の場面のイメージ画」「表現」「感情グラフ」などさまざまな対比へと拡げ、より深く作品を読み、主題に迫ることができた。
- ・ 主題から学んだことを活用し、自分の生活に照らし合わせてみることによって、より深く自分の生活や生き方を見つめることができた。
- ・ 「やまなし」の内容が「わからない」「わかりたい」という児童の初発の感想が、対比を活用する必然性となり、少しずつ宮沢賢治の世界観が明らかになるにつれ、さらに授業に意欲的に取り組むことができた。

<課題>

- 児童自らが既習の学習内容を「使える」と感じるようにするために、繰り返し指導していくことが大切であると再確認した。
- 他の教科や他の単元においても、そこで必要な知識や技能を明確にし、それをどのように活用するのかを整理した上で、単元を構成する必要がある。その際に、教師が指示をして児童が取り組むのではなく、児童自らが活用する必然性を感じるような工夫をしたい。
- 活用に関わる学習活動の「評価・改善」については、今後研究を進めていきたい。

---

1 I E A国際数学・理科教育動向調査 2007

2 佐藤 隆 『フィンランドに学ぶべきは「学力」なのか!』 かもがわ出版 2008

3 梶田 穎一 『<生きる力>の人間教育を』 金子書房 1997

4 岩間正則 『文科省全国学力調査 中学校国語B問題を授業する』 明治図書 2008

5 有元秀文 「P I S Aを超える国語科の活用力」『授業研究21』 明治図書 2009.1